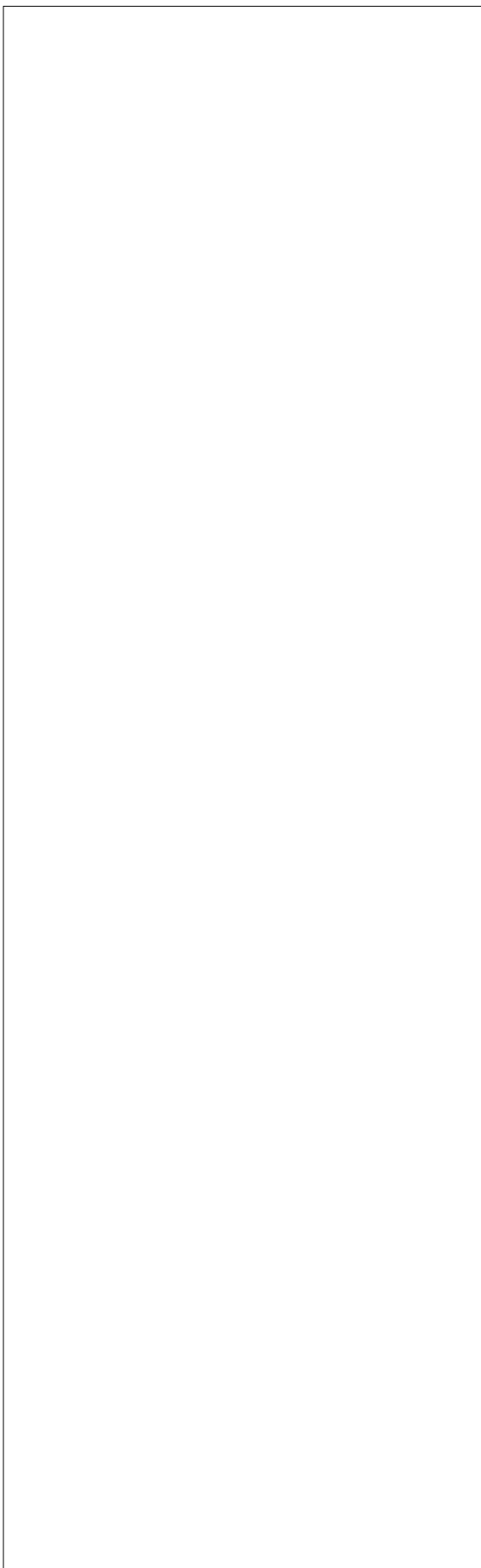


資料紹介 英派(英一艇)筆「四季加嶋風俗」屏風

高林 晶子

圖版一 英派(英一蜓)筆「四季加嶋風俗圖屏風」



資料紹介 英派(英一蛭)筆「四季加嶋風俗図屏風」 高林晶子

目次

はじめに

一、作者について

二、描かれた内容について

おわりに

資料データ

はじめに

平成十二年に当館収蔵品として受け入れた英派(英一蛭)筆「四季加嶋風俗図屏風」(図版一)は、東京の書家旧蔵のもので、八曲一隻の形態をとり、右から第一扇・二扇に春、三扇・四扇に夏、五扇・六扇に秋、七扇・八扇に冬の情景が描かれる。平成十四年度に修理を施し、十五年三月に完成に至った。第四扇・五扇には、南アルプス源流の釜無川と秩父山地源流の笛吹川の流れを集めて駿河湾に注ぐ、東海道きつての難所として知られた富士川と渡船の様子が、また、第六扇には冠着した富士山が描かれ、富士山南麓を描いた風俗画である。受け入れ前の調査において、第八扇にある款記(図版十八)は、最初の一文字「英」以外は、本紙欠損のため読みとれず、また印章も白文方印が押されているが不鮮明で判明せず、作者も制作年代も不詳であった。

板橋区立美術館の安村敏信氏によると、作者については、断定はできないが一蝶以来幕末まで狩野派系の一分派として独特な都市風俗画の世界を描き続けた英派の作であろうとのことだった。僅かに遺された筆跡から、一蝶作とする可能性の他に一蝶の孫弟子・英一蛭(天明八年(一七八八)没)作とも考えられ、仮に一蛭作とすれば世に出る初見の資料であり、屏風の形態をとる大作の

ため、代表作とも考えられるとの見解だった。また、描かれた内容についても、幕末の画家事典『古画備考』の一蝶の項に、北窓翁(一蝶)筆「富士川ノ富士」の存在が記されており、英派には富士川が流れる富士の麓を描くための粉本が伝えられていたとも考えられるという。

ここでは、本資料の作者について、並びに描かれた内容を富士南麓の地域的情景観に照らし合わせ、英一蝶を中心とした英派の作例と対比しながら考察し、紹介していきたい。

一、作者について

英派は、英一蝶を祖とする狩野派系の画派である。英一蝶は承応元年(一六五二)、京都の医師多賀白庵(伯庵)のもとに生まれた。父・白庵は伊勢亀山藩主石川侯の侍医であり、剣術も指南した。母は一説に花房氏、剃髪後は妙寿と称したという。一蝶の本姓は藤原、多賀氏、諱は英雄のちに信香、字を君受といい、幼名は猪三郎のち次右衛門または助之進(一説に助之丞)と改めた。剃髪して朝湖と称し、画家としてははじめ多賀朝湖の名で知られた。一蝶は幼くして父母とともに江戸へ下り、藩主の命により將軍家御用絵師・狩野派宗家の狩野安信(一六一三〜八五)に入門した。狩野派門下では、漢画だけでなく、土佐派をはじめとした大和絵に見られる和様技法なども含めた和漢折衷の技法の習得、主題においては、主従の關係や忠孝の恩義などを表し莊嚴な格式にふさわしいとされた勸戒図をはじめ、年中行事や四季・名所絵などをあらわす景物画、仏画など多種多様にわたる習得が行われたものと考えられている。先学が指摘するとおり、一蝶が彼の画業の早期にこのような体系的かつ本格的画技を体得したことは、後の各段階の画業において様々な様相を変えながらも、生涯着実な基礎力として結実している。後、師の安信から破門されるが、生涯画風は狩野派から離れた様子が見られないので、画業上の問題による破門ではな

く、旗本、豪商、大名らをまきこんだ吉原などといった悪所での遊興三昧によつて、度々入牢したことによるものといわれている。

その後一蝶は狩野派の枠を越えて当時の江戸に新しく興りつつあった都市風俗画、浮世絵へ共感を寄せていった。ちょうどその頃頭角をあらわしていたのが、浮世絵の創始者・菱川師宣（？〜一六九四）や、「浮世又兵衛」の異名をとり、悪所の風俗画や古典的テーマを親しみやすい感覚で描いた岩佐又兵衛（一五七八〜一六五〇）である。一方で俳諧にも親しんで芭蕉の門人たちとも交流を持ち、とりわけ高弟の榎本其角とは生涯の友であった。このように師宣らの浮世絵と芭蕉の俳諧という元禄期を代表する二大潮流が、風俗画家一蝶の誕生に大きく影響したと考えられている。一蝶の個性は、市井の風俗を生き生きと写し、また、古典的テーマをユーモラスに親しみをこめて描いたところにあり、また狩野派門人らしい格調高い筆と彩色によってこれらの風俗画に品格を添えたところにあるといわれる。

風俗画家として漸く世に認められるようになった一蝶は、将軍の縁筋にあたる大名をまきこんだ醜聞事件を引き起こし、元禄十一年（二六九八）、伊豆三宅島への遠流という厳罰に処される。三宅島での生活は宝永六年（一七〇九）まで約十二年にわたり、四十歳代から五十歳代という年齢的にも、また都市風俗画家としても、脂がのつていた時期だけにその打撃の大きさは容易に想像される。三宅島では、米や酒を売る店を商いながら、三宅島をはじめ御蔵島や新島、八丈島など近隣の伊豆諸島の島民から注文をとつて、仏画や七福神図などを描いて日々の糧としたといわれている。このほかに江戸の愛好家や知人に送つたとされる風俗画もあり、これらは往時の華やかで洗練された都市・江戸での生活を伝える明るい主題となっている。しかし配流生活が長きに及ぶにつれ画技は荒廃し、宝永六年に赦免されるころの作品への評価は高くない。

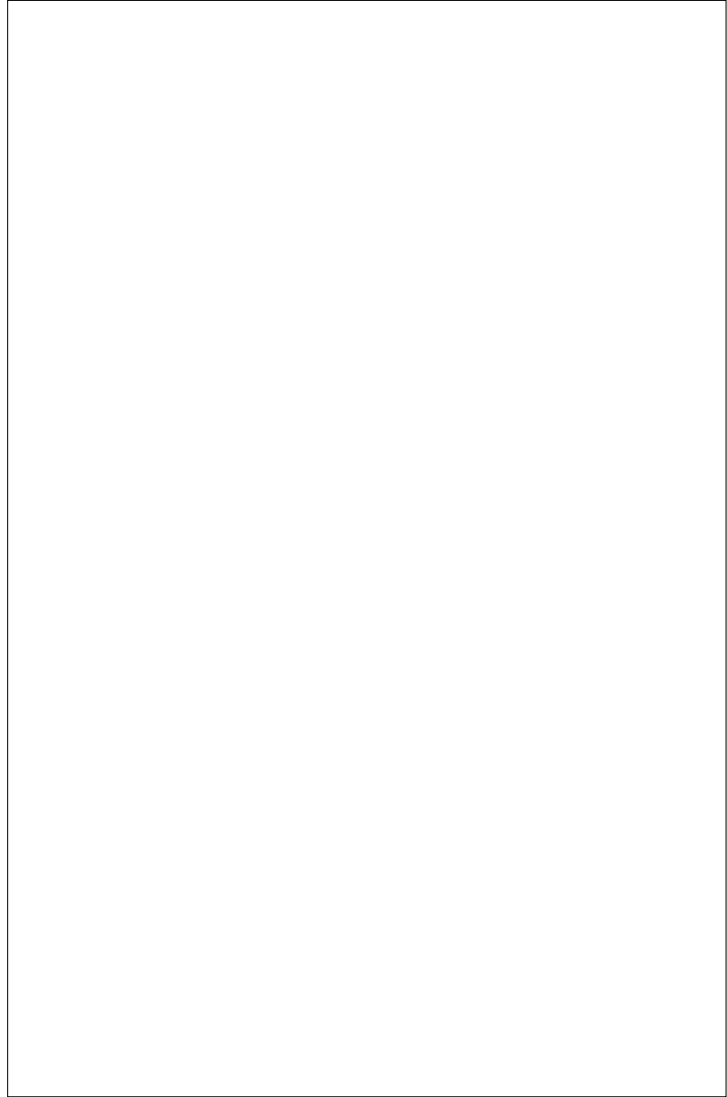
将軍・綱吉の死による大赦により、赦されて江戸へ帰つた一蝶は、画名を多

賀朝湖から「英一蝶」に、号を「北窓翁」へ改めた。江戸再帰後の一蝶は人氣絵師として歓迎され、自由闊達な都市風俗画の描き手として期待され、また一蝶もその期待にこたえて旺盛な作画活動を再開した。宝永年間末から正徳年間にかけて、彼の五十歳代末から六十歳代にかけての時期は、二点の「雨宿り図屏風」（パークコレクション、東京国立博物館）や、「田園風俗図屏風」（サントリ美術館）などの傑作に見られるように、充実した作品の多いことで知られる。ここには、人間や自然に向けられた細やかな観察が一蝶独自の瑞々しい感覚で活写されており、画家としては致命的な逆境を乗り越えて、このように復調するところに一蝶の並々ならぬ底力が感じられる。晩年の一蝶には狩野派への回帰を窺わせる古典的な主題やオーソドックスな表現の作例が目立つてくるが、狩野派に帰することはなく狩野派系の一分派・英派を形成していくことになる。水墨や淡彩で山水、人物、花鳥などの主題を描いた巻物「流書巻物」は、一蝶風の絵手本を示したもので、ここには英派の祖としての自覚が窺える一文が添えられ（註二）、英派の教則本と考えられている。英派は、一蝶直弟子の一舟（一六九八〜一七六八）と一水（佐脇嵩之、一七〇七〜一七七二）の二系列が幕末まで系脈を伝え、一舟系に香蝶楼歌川国貞（三代豊国、一七八六〜一八六四）が、一水系からは高嵩谷（一七三〇〜一八〇四）が出て、一蝶の功績を後世に伝えた（図版二）。

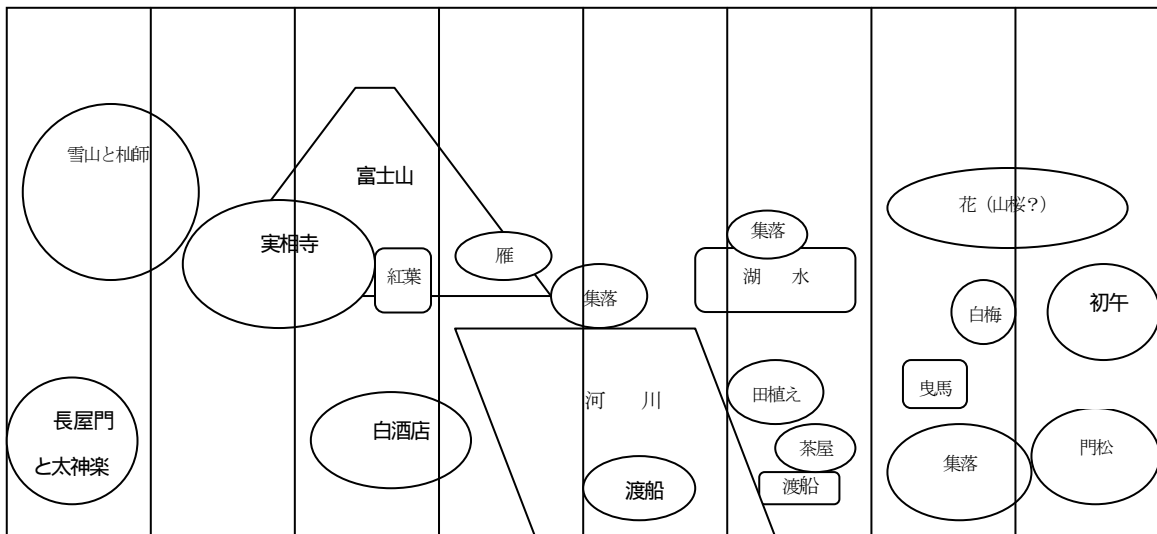
本資料の作者は英派の絵師によるものと見られるが、三文字目の運筆から一蝶の弟子・初代一蜂に師事した二代一蜂（一蛭）の作とする可能性が最も高い。これにより本資料が描かれた年代が、およそ江戸中期と想定される。作者について確証はできないが、描かれた内容や画の雰囲気は、英派の作品を手本としたと見られるものが多く見出せる。そこで、次の項では本資料に描かれた主題をいくつか解説すると共に、英派の始祖・一蝶の作例を中心に照らし合わせて紹介していきたい。

二、描かれた内容について

本資料の資料名（註二）にある「加嶋」は、富士川東岸に広がる加嶋平野を指す。加嶋平野は富士川の扇状地型デルタ地帯で、東は潤井川、北は岩本山、南は駿河湾に接している。かつて富士川は幾筋にも分かれて加嶋平野を流れており、川瀬の中の微高地に形成された村々の中には、村名に“島”のつくところが多い。「加嶋」の名は、これらの村々の総称といわれている。江戸時代以前の富士川の流路の変遷を見ていくと、鈴木富男氏は次のように想定している。平安時代の富士川本瀬は岩本山の麓に沿って東進し、潤井川と和田川を合わせて吉原湊（現在の田子の浦港）へ注ぎ、その枝川が加嶋平野へ何本も流れ込ん



図版二 英流系譜



図版三 「四季加嶋風俗図屏風」に見られる景物の配置図



図版四 富士南麓の地理的位置関係図（明治35年に測量された地図をもとに作成）

でいた。そして年月を経て富士川が運んだ砂礫が堆積したことにより、富士川の本瀬は岩本山を基点とすると東向きから東南向き、やがては南向きに流路を変え、鎌倉時代にはより西に寄って現在の富士市宮島付近から駿河湾へ注ぎ、以後この流路は枝川も含めて大きな変化はなかった。

このように加嶋平野を複雑に流れていた富士川は、時に氾濫し、村々は苦渋を強いられてきた。江戸初期になると、富士郡中里村の土豪であったといわれる古郡家が、重高・重政・重年の三代にわたって富士川治水と加嶋平野の新田開発に挑んだ。山峡を縫うように流れてきた富士川が一挙に川幅を広げる岩本山の麓からの一番出し・二番出しの築堤をはじめとして、重政による新田開発、重年による長さおよそ二・六八km（文化四年（一八〇七）松岡村覚書『金剛力』）にも及ぶ大規模な堤・雁堤の築堤等により、富士川の氾濫原であった加嶋平野は、「加嶋五千石」と称される米どころへ発展を遂げた。本資料には、このように富士川の乱流が治められ、以前よりも安定した生活や農作物の収穫が望めるようになった加嶋平野の平和な田園風景が描かれている。そこで、ここに描かれている内容について、少々詳しく見ていくこととする。

画面全体を見ていくと、下方に描かれる幅の広い道は、東海道であろう。第一扇・第二扇には門松や初午、野山の花々など春の景物が描かれ、第三扇・第四扇には田植えや水量豊かな河川など夏の景物が描かれる。第五扇・第六扇には落雁や紅葉、冠雪した富士など秋の景物が描かれ、第七扇・第八扇には雪山と杣師など冬の景物が描かれる。これらの配置を簡略に示したものが図版三であり、図版四の富士南麓の地理的位置関係図と比較しながらご覧いただきたい。

まず、中央に描かれる河川がどの河川に比定されるかであるが、渡船の様子が描かれており、ここで富士南麓における渡船や河川往来の歴史を簡単に振り返ってみる。平安時代の承和二年（八三五）の法令では、富士川に浮橋を設置するよう命令している。浮橋とは、対岸までの間に船を横に並べてつないだと

ころへ、板を渡した船橋である。中世の旅の様子を伝える『一遍聖絵』に描かれた富士川船橋が、よく知られるところである。鎌倉時代には、貞応二年（一二三三）、富士川を渡河した時の様子を収めた『海道記』や、建治三年（一二七七）、阿仏尼が訴訟のため京都から鎌倉へ下る途上、富士川を渡河した様子を収めた『十六夜日記』などにより、富士川は幾瀬にも分かれて流れ、渡河は馬か徒歩であったことが知れる。また、鎌倉幕府は京都と鎌倉との最短距離を結ぶため、海よりの浜海道を開設した。これにより吉原湊を渡船で渡す必要が生じ、見附宿を構えて渡船を司った。吉原湊での渡船は、東海道を通る旅人の利用が主であったが、戦国時代になると、戦国大名の軍事上の拠点としても利用されていった。吉原湊は富士川の渡し場と一体となった湊で、矢部氏が行者や商人の間屋を営み、渡船経営権を与えられるとともに、戦時における富士川への船橋の架橋・管理を任されていた。慶長四年（一五九九）、渡船経営権は矢部氏から川成島（現在の富士市川成島）の斎藤縫左衛門らに移された。後に江戸幕府が開かれ、五街道の整備が行われると、吉原湊と富士川下流での渡船は廃止され、富士川の渡河は全て岩淵村（現在の富士川町岩淵）で行うよう定められた。本資料が描かれた時期は前述したように江戸中期と考えられ、歴史的事実を対象に描いた歴史的要素は認められないことから、描かれた内容も江戸中期当時のものと想定される。江戸中期に東海道と交差する河川で渡船が行われた所は、西から順に桑名七里渡し・浜名湖今切渡し・天竜川・富士川・馬入川・六郷渡しであり、富士南麓では富士川のみである。従って、この中央の渡船の様子が描かれた河川とは、富士川と見るのが妥当であろう。

しかし、本資料に見られる名所・旧跡の配置は、実際の景観と必ずしも合致しない。この点について具体的に見ていくと、画中の富士川より左手、つまり川の西岸には、日蓮宗寺院の実相寺と見られる仁王門（本章④参照）と、東海道の宿場・吉原と蒲原の間にある立場・本市場の白酒店（本章⑤参照）と見ら

れる建物が描かれる。しかし、これらの実際の地理的位置は、川の東岸つまり画面上では本来川の右側に描かれるべき対象である。この実際の景観との相違は、本図の最上段の目的が、村絵図的な対象物の図示にあつたのではなく、この辺りの四季の景物を盛り込んだ風雅な風景表現にあつたことはいまでもない。しかし描かれた内容のいくつかは、明らかに富士南麓の地域的景観を表したものであり、類例があまり見られない点も鑑みると、郷土資料としての本資料の意義は、この矛盾を覆して余りある。

そこでここでは、この中から富士南麓の地域的景観として特徴的なものを主に挙げ、英派の作例もあわせながら紹介していく。

① 初午図（図版五）

〔図様解説〕

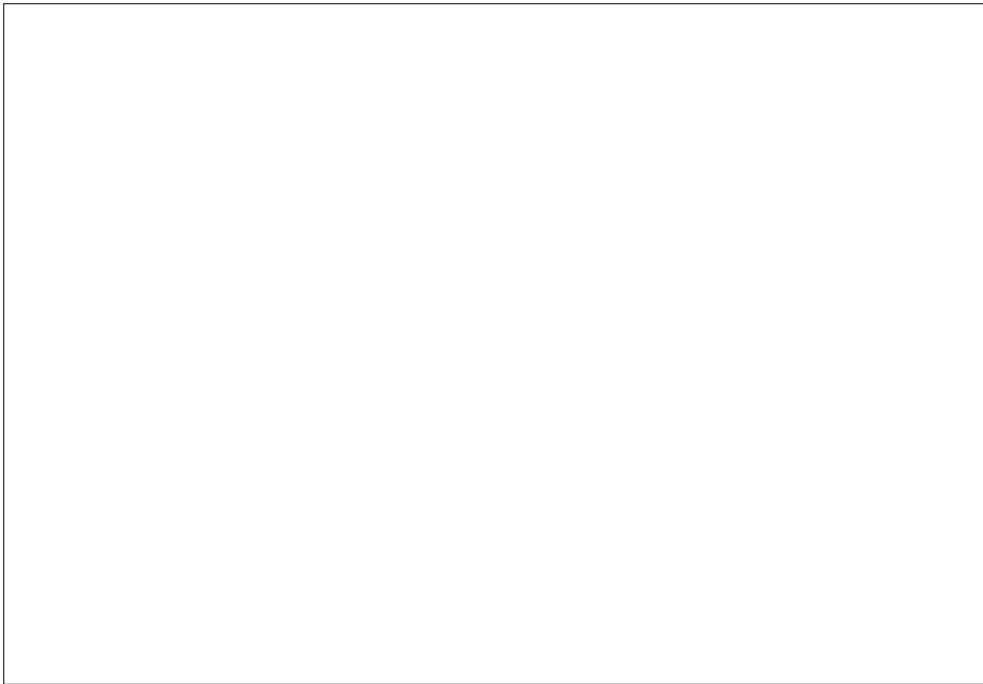
第一扇 春の場面に描かれる。稲荷神社の祭典・初午を描いたものである。

境内には「稲荷大明神」と書かれた旗が掲げられ、舞殿では狐の面をつけ扇子を手にした演者が狂言を演じ、子どもたちが楽しげにこれを見物している。参道には、供物の赤飯を持つ男や絵馬を担いだ男、「稲荷大明神」の旗を持つ男が描かれる。

〔富士南麓の地域的景観としての考察〕

稲荷神は庶民の信仰を集めた身近な神であり、その土地によって農耕、漁業、商売繁盛など様々な利益を求めて祀られている。現在の富士市内にある稲荷神社の数は三十にのぼる。また農村部の民家では、屋敷神として稲荷神が祀られていることが多い。この地における稲荷信仰は、開墾地の守護神としての性格が強いものと見られている。これは、本資料に関係する地域で示すと、江戸初期の築堤により、富士川の氾濫を治めて加嶋平野に水田地帯が形成されたという新田開発の歴史が想起される。ちなみに現在の初午では、

「正一位稲荷大明神」と記した旗を奉納するが、これはそれほど古い歴史をもつものではなく、江戸中期以降の習慣とされる。



図版五 初午図（部分拡大）

〔英派の作例〕

一橋徳川家に伝えられた英一蝶筆『風俗画絵鑑』（茨城県歴史館保管）に「初午図」、「社前狂言図」がある。『風俗画絵鑑』は、一蝶三宅島配流前の多賀朝湖時代の作例で、戯画・風俗画・俳画など和風の小品が二十四図集められた画帖である。「初午図」には、烏帽子を被り白い水干を着た社人が絵馬を担いで鳥居の前に描かれ、また「社前狂言図」には、猿の面をつけ扇子を持つて踊る演者と鳥居が描かれ、これは晩年まで一蝶が得意とした主題といわれる。これらの主題の継承が、本資料にも垣間見える。

② 渡船図（図版六）

〔図様解説〕

第四扇、夏の場面に描かれる。一艘の渡し船に、猿廻し、山伏、馬子と馬、母子、鹿島の事触（註三）、巡礼、琵琶法師、船頭らが描かれる。

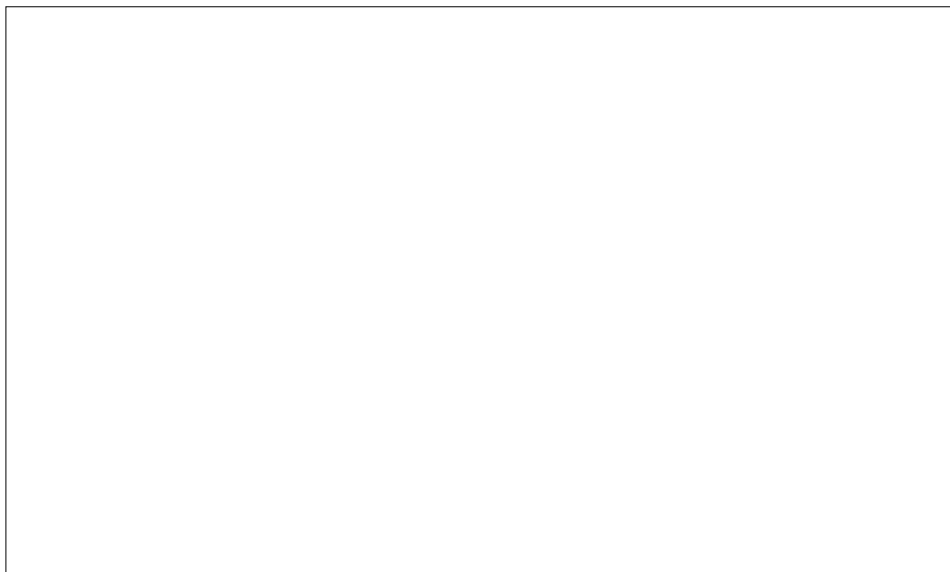
〔富士南麓の地域的景観としての考察〕

江戸時代の富士川での渡船は、当初渡船場が川成島村にあつて渡船の運営も同村が行っていたが、出水により川筋が変わつたためか、江戸初期の慶長年間（一五九六～一六一五）には対岸の岩淵村が替わつて渡船を運営した。さらに寛永年間（一六二四～四四）には岩本村（現在の富士市岩本）がこれに加わり、以降岩淵村三分の二、岩本村三分の一を各々分担した。渡船場は西岸岩淵村では字尼ヶ淵から中ノ郷村境まで、東岸の岩本村では松岡村地先の一番外しから川下二十町ほどの間に限られ、常に川瀬の都合の良いところを選んで船が発着した。

儒者・林羅山が元和二年（一六一六）『丙辰紀行』に「船中の人は目まひ魂の消る心地ぞしける」と記したことからも、富士川の荒々しい様が窺われる。



図版六 渡船図(部分拡大)



図版七 「乗合船図」(東京国立博物館蔵 写真提供:同館)

〔英派の作例〕

東京国立博物館が所蔵している英一蝶筆「乗合船図」(図版七)には、猿廻し、山伏、鹿島の事触、飛脚など様々な職種の人々が一艘の渡し船の中に描かれる。このような乗合船図は、一蝶の代表作「雨宿り図屏風」などと同様に、老若男女多種多様の人物を二図におさめるのに好都合な主題のため、都市風俗画家一蝶が好んで描いた主題であった。

③ 富士図 (図版八)



図版八 富士図 (部分拡大)

〔図様解説〕

第六扇、秋の場面に描かれる。大きく裾野を広げる富士にうす雲がたなびき、雁の一群が山の端を行く。富士は白く雪を被り、本資料中の季節の移り変わりを劇的に感じさせる。

〔富士南麓の地域的景観としての考察〕

加嶋は富士山の裾野に位置する平野であり、富士の山容が他の山などに隠されることなく全て望める絶景のビューポイントである。

例年富士山の初冠雪は九月下旬頃に見られることが多く、

この画の当時の暦では八月下旬ということになるが、中腹

あたりまですっかり雪化粧姿のところを見ると、実際はも

う少しあとの晩秋の山容と考えられる。向かって右側にた

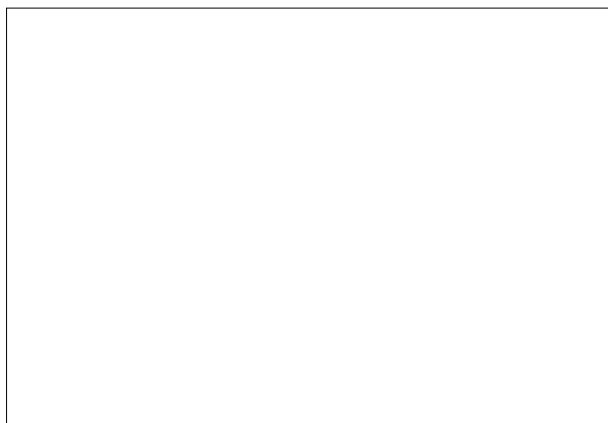
なびく雲は、そのときすでにあったであろう宝永山(註四)

を隠すかのように、やや不自然に逆巻いている。宝永噴火

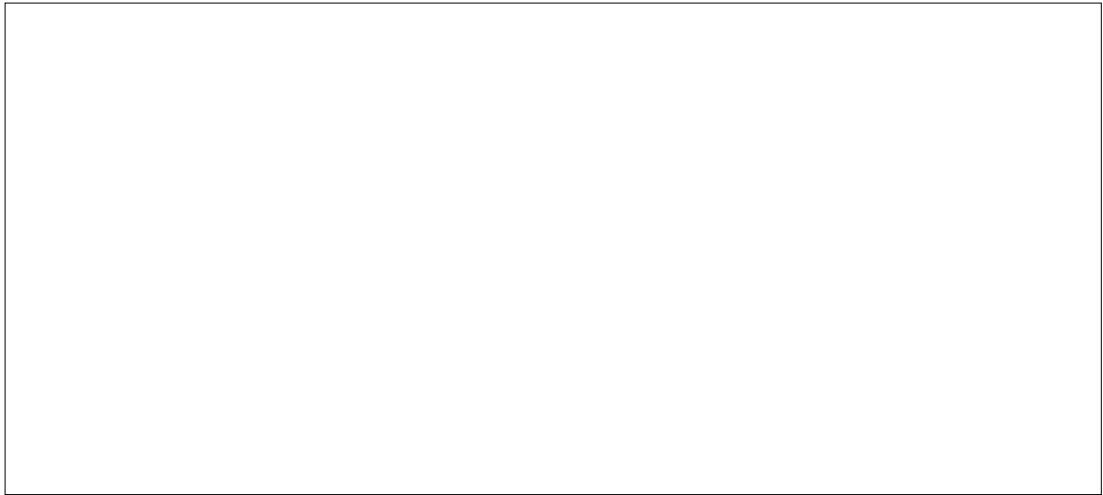
間もないころの富士は、その変わり果てた姿が人々に異様

なものとしてとらえられたらしく、北斎などもその様を「富士山にできた瘤

として伝えている(図版九)。あくまで想像の域を出ないが、この雲を意図的に描いたものと仮定するならば、当時の人々の富士山観が窺え、興味深い。



図版九 葛飾北斎画『富嶽百景』(当館蔵)より



図版十 「富士図」(山梨県蔵 写真提供:同県)

〔英派の作例〕

一蝶も好んで富士図を描いているので、いくつか紹介していく。前述の『風俗画絵鑑』には「富岳春景図」、「富岳秋景図」があり、春景図には霞に包まれた富士をバックに田起こしを行う農夫や集落、桜など春の習俗が描かれる。一方、秋景図には澄みきった高い空に映える富士と、紅葉が秋の習俗を伝え、川を渡る旅人が描かれる。描かれた人物の小ささが富士の雄大さを強調し、かつ小さいながらも人の営みを細かに描きこむ姿勢に、一蝶の風俗画家らしい視点が垣間見える。

また、山梨県所蔵の「富士図」(図版十一)には、「北窓翁一蝶書」の款記と「趣在山雲泉石間」の朱文印が押され、やはり江戸再帰後の作である。富士は冠雪しており、里と山の端に紅葉が見えるところから、季節は秋と見られ、近景には渡船の様子が描かれる。細緻な筆遣いで馬や人物が巧みに配され、船中には猿廻しや鹿島の事触などの、一蝶得意の人物が描かれる。

このほかにも一蝶の富士図としては、探幽の富士図を連想させる江戸狩野風の「富士山図」(東京国立博物館蔵)などが知られる。

④ 実相寺図(図版十二)

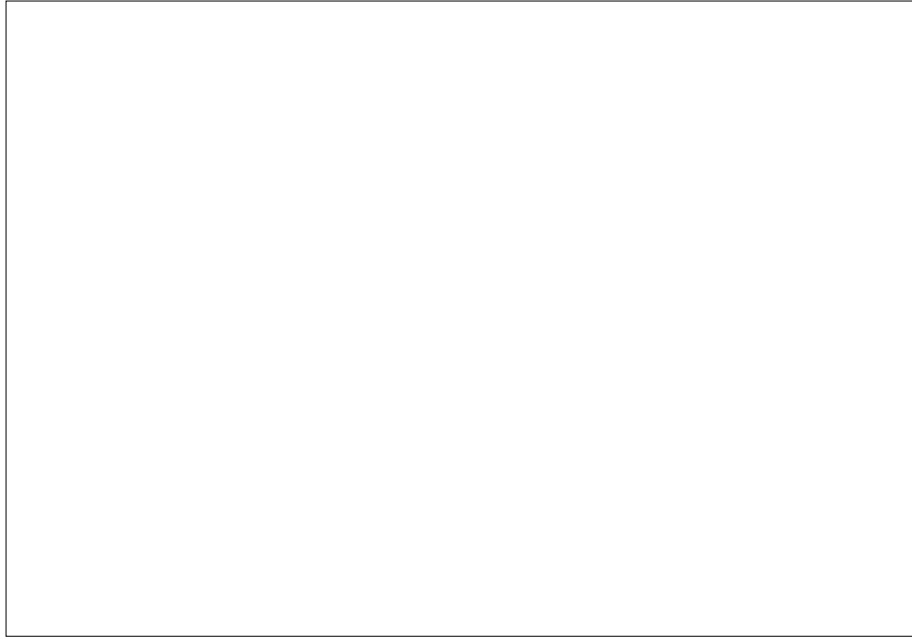
〔図様解説〕

第六扇、秋の場面に描かれる。朱に彩られた茅葺の門には、両脇に仁王像が見える。二人の参詣者が圧倒されている様がよく見て取れる。門の奥には茅葺の堂宇が、裏山には釣鐘が描かれる。

〔富士南麓の地域的景観としての考察〕

実相寺は、富士市岩本にある日蓮宗の寺院である。久安年間(一一四五～一一五〇)に鳥羽上皇の発願を受けた比叡山の智印上人が開創したと伝えられ、当初天台宗寺院であったが、日蓮がこの寺の一切経蔵で経典を閲読して

「立正安国論」を構想したといわれ、のちに日蓮宗の著名な霊場となった。現在の伽藍は、「安国道場」の扁額を掲げた総門をくぐると、仁王門と鐘楼が見え、仁王門をくぐると本堂・大書院、その背後には日蓮像を祀る祖師



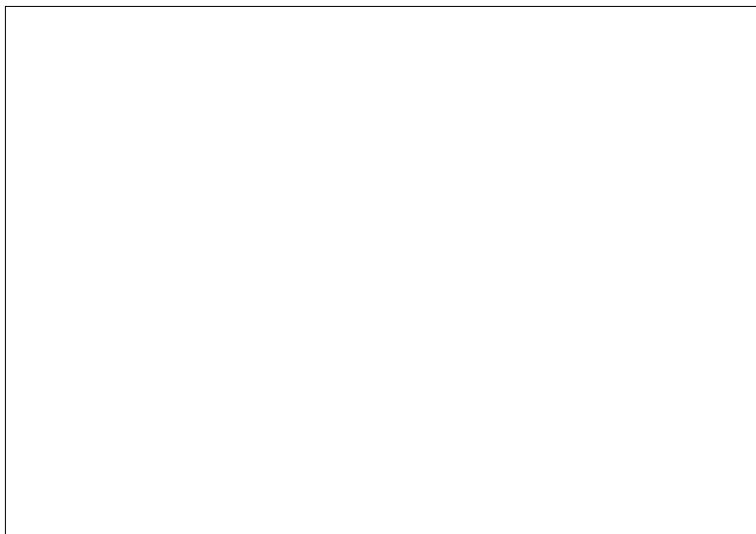
図版十一 実相寺図（部分拡大）

堂がある。そこから岩本山の傾斜地を登ると、日蓮がこもったという一切経蔵が現れ、さらに奥には守護神である稲荷社や七面堂などが配され、岩本山の南山裾にその信仰空間を構成している。

江戸時代、岩本村名主を勤めた山崎家所蔵の「実相寺絵図（元禄十年九月七日）」（図版十三）には、荒い描写ではあるが、ほぼ現在の伽藍配置と同じ境内の様子が描かれる。仁王門の仁王像は描かれていないが、門の姿形は本資料に描かれるものと酷似している。

木造仁王像（金剛力士像）は、現在富士市指定有形文化財であり、江戸時代初期の成立と推定されている。また仁王門には享保年間（一七一六～一七三五）の落書きがありそれ以前の建立とされている。

本資料に描かれる仁王門背後の堂宇は、日蓮がこもったという一切経蔵であろう。



図版十二 現在の実相寺仁王門



図版十三 「実相寺絵図(元禄10年9月7日)」(部分拡大 山崎家蔵)

⑤ 白酒店図(図版十四)

〔図様解説〕

第六扇、秋の場面に描かれる。新酒ができた証に造酒屋が店頭に一年間飾るといふ酒林(杉の葉を束ね球状に整えたもの)が吊るされた店先には、寛く旅人や酒を供する女が描かれる。縁台に腰掛け、上半身裸で大きく伸びをする男や煙管で煙草を燻らす男、大きな餅を頬張る男などが活き活きと描かれ、店内の弁慶には串に通した焼き魚が挿されている。竈には鍋がかかけられ、女が火の番をしている。軒下には紋を白く染め抜いた暖簾が掛けられている。〔富士南麓の地域的景観としての考察〕

江戸時代、東海道の江戸から数えて十四番目の宿場・吉原宿と隣の蒲原宿の間にあつた立場・本市場は、茶店で旅人に白酒を提供していたことが知られている。尾張藩士の高力猿候庵が天明六年(一七八六)、尾張から江戸へ向かう道中の実見をもとに著した『東街便覧図略』(図版十五)には、本市場の茶店の様子が詳しく描かれ、「是を商へる家毎に、銚子盃台猪口の事き小盃等厨子棚様の物に飾て殊奇麗なる店つき也。又軒毎の板持を黒ぬりにせしも所の風俗にや。他に異也。」と記されている。

『東街便覧図略』の白酒店の軒下にも、本資料のものとよく似た暖簾が描かれているが、扉を廻らし屋根付きの門を構えるなど、より格式の高い建物のように思われる。

〔英派の作例〕

ワシントンのフリーア美術館所蔵の英一蝶筆「田園図屏風」は、一蝶最晩年の作とされ、小屏風六曲一双の画面に、春から秋への季節の移り変わりを盛り込みつつ、田園風俗を絵巻物風に展開させている。画面は右隻の右から、釣鐘のある山寺の峠道に始まり、機が織られる農家や酒林の掛かる茶屋の前を通り過ぎ渡し船で対岸に渡ると、賑やかな田植えの風景に導かれる。続い



図版十四 白酒店図(部分拡大)



図版十五 『東街便覧図略』(名古屋市博物館蔵 写真提供:同館)

て左隻に目を移すと、神社の境内には宮芝居の小屋がかり、橋を渡った道沿いの農家では、収穫後の脱穀・選別などの作業が行われ、牛馬に運ばせた米俵が、高札場を備えた門扉の構えも格子高い屋敷へと届けられている。右隻に描かれる茶屋は、酒林を店先に掲げ軒下に暖簾を廻らした茅葺き屋根の建物で、角度は異なるが、建物の屋根のつくりや酒林の掛かり方、笠を被った男が足下を直す様子や店先の縁台とそこに腰掛けた伸びをする男などに本資料との類似点が見出される。また、渡船や田植え、釣鐘などの主題からも、本資料がこの「田園図屏風」の影響を強く受けていることが窺える。

⑥ 長屋門と大神楽図(図版十六)

〔図様解説〕

第八扇、冬の場面に描かれる。高札場を門前に備え、長屋門を有した屋敷の前で大神楽が演じられている。太鼓を肩に担いだ男、小鼓を打つ男、撥を操る男、横笛を吹く男、獅子頭の下から顔をのぞかせて様子を見る男、総勢五人の旅芸人だろうか。門の中からは赤子を抱いた人物が、外には活発な子どもをはじめとして老若男女がこれに見入っている。

〔富士南麓の地域的景観としての考察〕

門は近代に入るまでは、武家屋敷のもので、農家では村役人以上の家柄でなければ許されなかった。本資料に描かれる長屋門も例に漏れず、門前の高札場から察しても、おそらく名主級の屋敷がここに描かれているものと思われる。ちなみに実相寺のある岩本村の高札場は、実相寺山門を出て東にむかい、小さな用水路と道が交わる地点にあった。ここには現在、前掲の「実相寺絵図(元禄十年九月七日)」の所蔵者で江戸時代名主も務めたという山崎家が屋敷を構えている。しかし再三述べているように、本資料の地理的位置関係が正確なものとはとらえにくく、この長屋門が果たしてどこに位置して

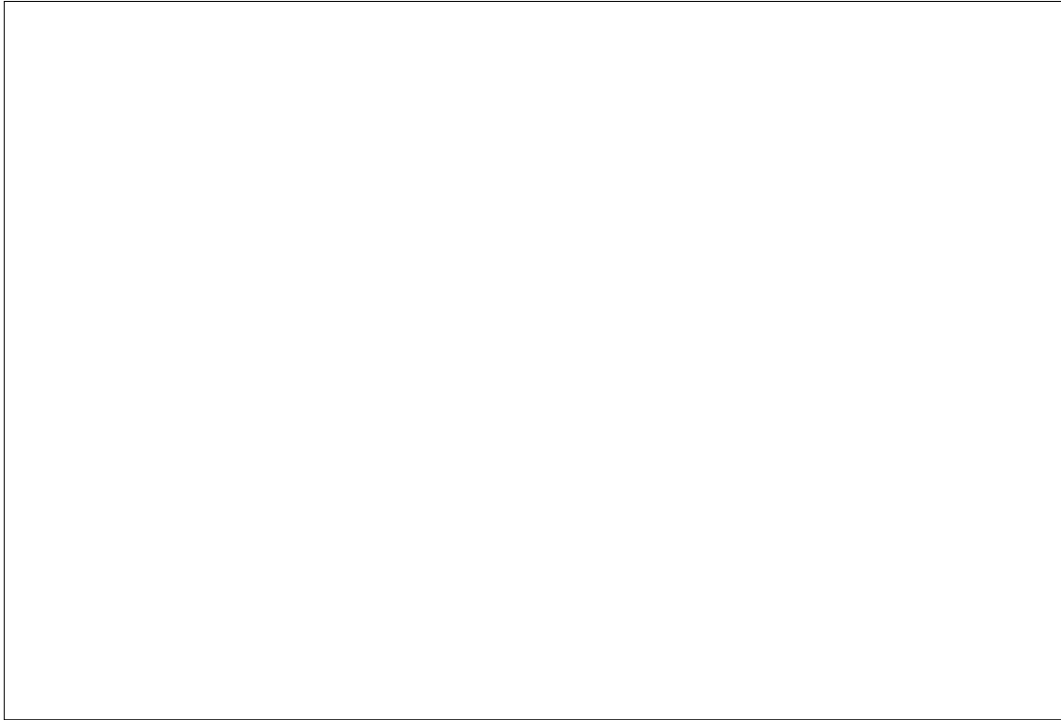
いたものなのか比定することは困難である。

〔英派の作例〕

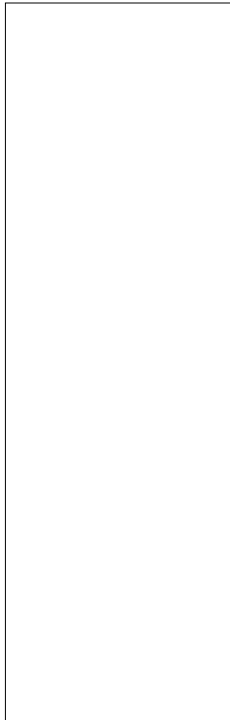
大倉集古館所蔵の英一蝶の作『雑画帖』には、「大神楽図」(図版十七)が所収されている。三宅島配流前の多賀朝湖時代の作例である。大神楽図もまた、一蝶得意の主題であって、太鼓の撥を指先にのせて器用に操る様が巧みに描き出されている。この人物を中心として、太鼓を肩にのせる人物と鼓を打ちながら足を挙げて調子をとる人物も巧妙に描き出し、まとまった構図となっていて、風俗画家一蝶の真骨頂ともいえるであろう。本資料中の長屋門前に配された人物は、ここに描かれた三人の人物と少々位置のずれや筆の違いはあるものの、掲げる太鼓や挙げる手足、着物の文様などに類似点が見いだせる。筆は一蝶のそれに比すれば豊かさに欠け、人物の表情にも硬さが見られるが、この『雑画帖』所収画を手本として本資料が描かれたものと思像される。

おわりに

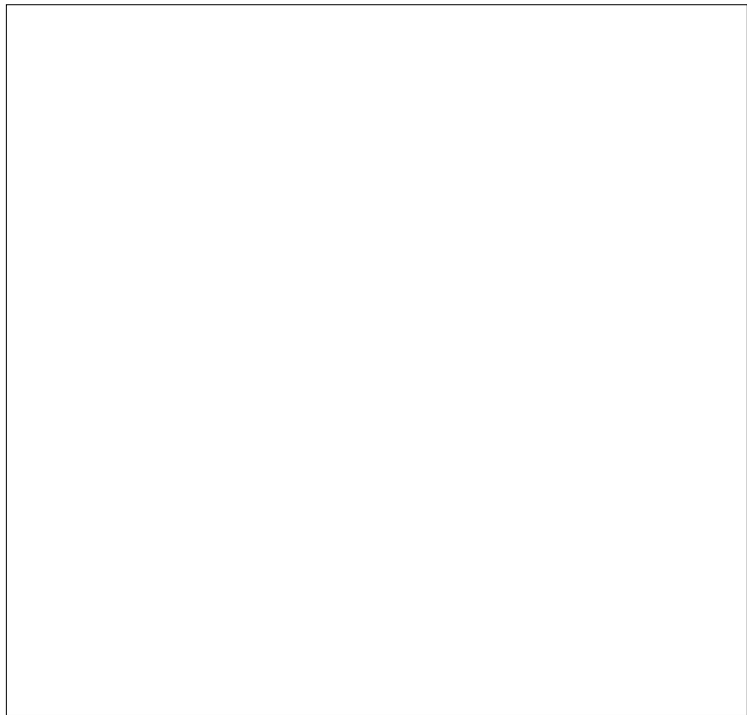
ここまで紙幅が許す限り、また管見の及ぶ限りではあるが、四季加嶋風俗図屏風について紹介してきた。四季加嶋風俗図屏風は、富士南麓の歴史を探る者にとつて、厳密に事実を物語る資料とはいえないが、非常に興味深い資料である。普遍的な美としての富士図や、街道筋の名所・名物をいっしょにお定まりに描いた浮世絵などは多種多様に確認されるが、本資料のように実際に現地に取材したと見られる実在の寺社や景物が描かれた作例は、この地においては類例が少ない。もちろん民俗的な習慣や服装など細かい点については、師の粉本を元に描いたと見られるものも多く、参考に値しないが、それにつけてもどのようなきっかけで本資料が描かれることとなったのか、興味の尽きないところではある。



図版十六 長屋門と太神楽図（部分拡大）



図版十八 落款（部分拡大）



図版十七 「太神楽図」『雑画帖』（大倉集古館蔵 写真提供：同館）

本文註

- 註一、巻末に「右一軸 慕「名画丹青古跡」 次頭「我流汚墨」者也 北函翁英氏一蝶」と記され、朱文方印「信香之印」、白文方印「英一蝶」が捺されている。
- 註二、資料名は画中や題箋、箱書きなどによるものではなく、描かれた内容から便宜上当館がつけたものである。
- 註三、江戸時代の半宗教的職業集団。常陸鹿島神宮の神託と称してその年の豊凶、疫病などを触れ歩いた。折烏帽子に狩衣姿の神巫が幣帛を襟にはさみ、銅拍子を鳴らし、秘符を授けて金銭を乞い歩いた。
- 註四、宝永四年（一七〇七）、富士山南東斜面の五合目付近での噴火により生じた火口と山。

資料データ

- 四季加嶋風俗図屏風 英派（英一蝶）筆 八曲屏風一隻
- 〔寸法〕各縦一一八・〇センチメートル 横三六〇・八センチメートル
- 〔品質形状〕紙本着色 屏風装
- 〔款記印章〕（第八扇） 英□□筆 印章解読不能（白文方印）
- 〔時代〕江戸時代中期
- 〔受入方法〕平成十二年度購入
- 〔受入番号〕購入一〇五二
- 〔分類番号〕一—a、富士山
- 〔修理報告〕
- ・修理前の状況
 - ①品質形状及び寸法
 - 紙本淡彩、屏風、緑黒漆塗、尾瀬銀、屏風裏揉み紙、箱なし、寸法縦一一五・八センチメートル、横三五二・〇センチメートル
 - ②破損状況
 - 虫穴があった。破れや深い傷があった。旧修理での補彩画不適切で、目立っていた。旧修理で本紙片が正しくない場所に置かれており画面が見難かった。虫糞があった。尾瀬部分に本紙が入り込んでおり、画面を小さくしていた。
 - ・修理の概要
 - 下地と縁は痛みがひどく、ゆがみも見られたため、新調した。旧修理での不適切な補彩紙は全て除去し、あらたに補修しなおした。また、本紙片がゆがめられて付けられて、絵の線が繋がらない箇所は、正しく線が繋がるように直した。
 - 修理前の下地は、本紙に対して小さかったため、絵の四隅が隠れてしまっていた。新調した下地は修理前よりも大きいものにして、今まで隠れていた絵を出すようにした。
 - ・修理後の状況
 - 紙本淡彩、屏風、緑黒漆塗、尾瀬・金砂子撒、屏風裏鼠地鼠雲母雀型唐紙、箱桐箱新調
 - ・施工時期
 - 平成十四年度

- ・施工者
 - 山口聰太郎（山口墨仁堂）

主要参考文献

- 小林忠・神原悟著『日本美術絵画全集 第十六巻 守景／一蝶』株式会社集英社発行 一九八二
- 板橋区立美術館編集・発行『英一蝶』展図録 一九八四
- 小林忠編著『日本の美術 第二六〇号 英一蝶』文化庁・東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館監修 至文堂発行 一九八八
- 武田恒夫著『狩野派絵画史』株式会社吉川弘文館発行 一九九五
- 武田恒夫著『日本絵画と歳時 景物画史論』株式会社ベリかん社発行 一九九〇
- 水本邦彦著『絵図と景観の近世』校倉書房発行 二〇〇二
- 藤懸静也著『英一蝶筆太神楽紫式部図』『国華 第五一四号』国華社発行 一九三三
- 今村龍一著『英一蝶筆雑画帖について』『国華 第六五四号』国華社発行 一九四六
- 小林忠著『一蝶年賦、一蝶関係資料』『国華 第九二〇号』国華社発行 一九六八
- 富士市史編纂委員会編著『富士市史 上巻』富士市発行 一九八二
- 静岡県編集・発行『静岡県史 資料編5 中世一』一九八九
- 静岡県編集・発行『静岡県史 通史編2 中世』一九九七
- 静岡県編集・発行『静岡県史 通史編3 近世一』一九九六
- 静岡県編集・発行『静岡県史 通史編4 近世二』一九九七
- 静岡県編集・発行『静岡県史 資料編11 近世三』一九九四
- 静岡県編集・発行『静岡県史 資料編12 近世四』一九九五
- 静岡県編集・発行『静岡県史 資料編13 近世五』一九九〇
- 鈴木富男著『東海道吉原宿』駿河郷土史研究会発行 一九九五
- 小山真人責任編集『富士を知る』株式会社集英社発行 二〇〇二
- 山折哲雄編集『稲荷信仰事典 神仏信仰事典シリーズ3』戎光祥出版発行 一九九九
- 富士市教育委員会編集・発行『富士市のまつり』一九八八
- 富士市教育委員会編集・発行『富士市の文化財』二〇〇一
- 富士市立博物館編集・発行『第三三回企画展 郷土と酒く富士の麓の酒物語』一九九六
- 富士市立博物館編集・発行『第三四回企画展 富士川の舟運』一九九七
- 富士市立博物館編集・発行『第三七回企画展 加島 米と水く富士川下流の米づくり』一九九八
- 富士市立博物館編集・発行『第三八回企画展 富士がゆれた時く宝永の富士山噴火と安政大地震』二〇〇〇

（当館学芸員）